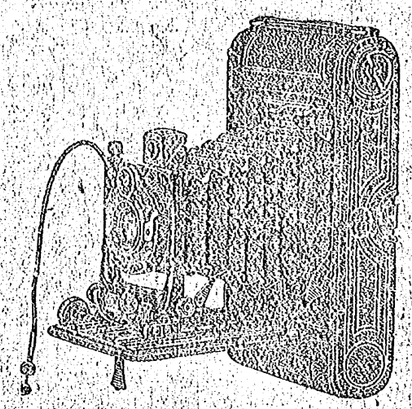
慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	組合社会主義に対するウィザァスの批評
Sub Title	
Author	三邊, 金蔵
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1921
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.15, No.7 (1921. 7) ,p.1005(93)- 1018(106)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19210701-0093

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

電話番號が變りました
銀座四〇二一番

澤渡寫眞器械店
櫻田本郷町（電車停留所角）

雜　錄

組合社會主義に對するウィザアスの批評

三　邊　金　藏

資本主義制度の弊害を認むると共に國家社會主義は誠に是等弊害中の幾つかを廢し得可きも而かも其は唯だ生産額に大損失を見んとする危險を冒し、道德的並びに知識的發達を枯死せしむるが如き惡影響を齎らさんとする官僚的産業管理を設定することに依りてのみ、之を能くし得るものなりと云ふ結論に到達せざるを得ざりし者にとりては、國家的組合制度（ナショナルギルド）の設定に依りて社會の改革を圖らんとする社會主義の一派ありと云ふ事實は空谷に跫音を聞く以上の喜悅であるが、乍併初めて組合（ギルド）社會主義の泉より掬べる者の胸中には自から種々なる疑惑の湧出するを禁め得ぬのである。何となれば組合社會主義の說く所の大體は、賃銀制度を廢止して經濟上の自由を確保し、一切の産業の組織を變更して手足若くは頭腦を勞する總ての勞働者を包含し一切の潛り勞働者を排除せる大なる團結となし資本家を無用に歸せしめ、大なる團結を勞働者に自由を與ふる新なる組合となし、且つ「機能に因る組織」を基礎として新しき社會を建設するに在り、と謂ひ得るが如くにして彼のサンディカリズムとの相違は主として國家に對する態度の相違に在りと稱し得るが如くであるが、吾々は先づ第一には生産者は如何にして消費者としての自己の犧牲によらずして經濟的自由を確保し得るであらうか、各人は商品若くは勤務の一種

類若くは其一種類の何分の一かを生産して數百千種を消費するの常なれば各個人の享くる自由の總計は斯の如くにして果して能く增進せられ得可きかと危ぶまざるを得ないのである。次に又た組合（ギルド）は如何にして價値の問題を解決せんとするか、換言すれば彼等は如何なる基礎の上に立ちて其生産物を交換せんとするか？。國家社會主義は或は其生産する所のもの、或は其消費する所のものを自由に撰擇する權利を各個人に許さず、プロシア流に之を割り當てゝ此問題を解決し得るが如くであるが、組合社會主義は如何にして此問題を解かんとするか？。企業と創意とは組合の獨占下に在りて其が國家の管理の下に在ると殆ど異る所を見ざる程度まで阻害せらるゝと果してないであろうか？。組合に加入す可き權利を決定するは何人の仕事であるか？。組合主義（ギルドゾメン）者は誠に普通の傭主に對してよりも組合に對して一層勤勉忠實に働くであろうか？若し何れかの組合が周到綿密なる獨占力を施行する其傍に於て、相互的掠奪の惡戯を開始したりとせば其結果は果して如何なることゝなるであろうか？。と斯く幾多の問題を重ねざるを得ないのである。而して彼の所謂「機能に因る組織」とは果して何事を意味するのであるか？。若し人は先づ第一に屠夫たり麵麭燒たる可きにして、國民の一員たり人類同胞の一人たるは第二段のことなりとならば、其はまた餘りに唯物的見解に偏せるものゝ如く自分には思考せらる。而して其は必ずや各種の利害が協働と競爭とに依りて調和せられ愉々たる諧調と成る――若くは成らんとする――大なる社會の一員として有する各人の見解とは甚だ相異れる利己的にして又た部分的なる所見を生まんとするであろう。組合社會主義の文獻の研究は、其執筆者の熱誠にも拘らず是等の困難が除却されて居らぬことを吾々に告知する。國家社會主義は有能なる官僚と命ぜられたる所を忠實勤勉に遂行する柔順なる人民とを以てすれば、理論上に於ては其可能なるを發見する次第であるが、組合社會主義者の計畫が如何にして、自己の確保せんとする目的の多くを犧牲に供することとなくして、兎にも角にも運行する制度中に篏入せらる可きやは容易に之を審にし能はぬのである。

却説 G. D. H. Cole（コオル）は彼の「産業自治論」の第四頁に於て吾々に次の如く語つて居る。「自分は此書に於て産業的改造に對する二三の一般的献策を開陳せんとする。是等の献策は産業管理は民本主義化せらる可きものなり、勞働者は漸次に增大する管理權と責任とを保有す可きにして、資本家の至上權は勞働者が民本主義化せる國家と相提携して産業を管理する産業的民本主義の制度に賴りてのみ之を覆し得るものなりと云ふ思想に基くのである。是が即ち國家的組合（ナシヨナルギルド）制度であつて其最も顯著なる思想は、個々の勞働者は單に「手足」として、――日增しに重要の度を失ひつゝある産業上の器械の助手として見られてはならぬ、彼は權利を有し責任を有し、人間の精神と自己實現、自治及び個人的自由に對する願望とを有する人間の一人として見られねばならぬと云ふことである。」

此顯著なる思想は今日に於ては吾人の大多數に依りて懷かるゝ所であるが、併し此は果して大なる獨占の幾團かを設定するに因りて達成せらる可きものであろうか？。國家の産業管理と官僚的專制とに對する辛辣なる批評が、組合社會主義者特にコオル氏自らに依りて提唱せられたる後に於て、産業管理が勞働者に依り「民本主義化せる國家と提携して」遂行せられざる可

からざるを見るは少しく失望の感なきを得ない次第である。乍併單に國家と提携してと謂はずして故らに民本主義化せる國家と提携して云ふより見れば、所謂「民本主義化せる」なる語は此場合に於ては幾多の祝福を包擁するものと解せらる可きであつて、而して又た恐らくは實際に之を包擁することであろう。コオル氏は第六頁に至り之が語を續けて次の如く説く、「賃銀制度の破壞と生産者に與ふるに自己の生涯と仕事との管理に出來得る限り十分に參與するの權を以てすることゝの至大なる必要を認知することに依りて、ナショナァル・ギルヅメン（國家的組合主義者）は又た消費者の代表者、隣接たる關係より生ずる共同の利害を有し、生活手段の共同使用者たる關係を有する一切の人々の代表者たる國家及び都市の眞正なる機能を發見した。故に彼等は産業の管理が、一方に於て消費者の社會の利益を保障すると同時に、他方に於ては生産者に與ふるに自己の爲めに生産を組織するの自由を以てし得るが如くに、生産者の組織と消費者の組織との間に分配せられ得る制度を案出せんと努む。」而して六三頁に於ては再び吾人に告げて「第一に國家的組合主義者は自己の覓むる所の何たるやを明知す。彼等の目的は資本家的生産制度の廢止に依りて隨伴せらるゝ國家と勞働との間の組合である」と主張する。

故に國家的組合制度の下に於ては彼の如く痛罵せられたる國家は消費者を代表し其利益を擁護すると云ふ極めて重要なる機能を爲すことゝなるのであるが、同時に勞働者は自ら生産を組織立つ可き自由を有たねばならぬのである。知らず此自由は如何許り可能にして、其意味する所は果して何なりや？、其は勞働者は、消費者が如何なる事物を所有し享樂せんと欲するかを問はずして、只管に自己の好む所を産出するを得可しとの意義であるか？。而して若し假りに然りとせば、勞働者が何人もが希望せざる物を生産せるが如き場合には、彼等は如何にして自己の勞作に對して報酬せらる可きであろうか？換言すれば彼等は他人の生産しつゝある何等かの財に對して如何なる權利を有するであろうか？。コオル氏は他の個所に於て「勞働者は善き物を作る可きか若くは惡き物を作る可きかを撰擇する」自由を有せざる可からずと説き消費者は斯くて生産せられたる物を擇るか若くは之を措く可しと奬めて居るやうである。乍併生産は他の一切の制度の下に於けると同樣國家的組合（ナショナルギルド）制度（システム）の下に於ても亦た――或は現在の制度の下に於けるが如く市場に於ける購買に依りて自ら表明せらるゝにせよ、或はまた國家社會主義の下に於ては然る可しと想像せらるゝが如く如何なる財を享受するが社會の爲めに然る可しと決定する官僚の決定に依りて表明せらるゝにせよ――消費者の必要に依つて左右せらる可き性質のものであろう。從つて生産者は經濟的に自己を是認せしめんとせば其決定が如何なる方法に依りて到達せらるゝにせよ、兎にも角にも消費者に依りて慾求せらるゝものを生産せねばならぬのである。若し然らずして彼等の索めざる物を生産したりとせんか、然らば彼の生産者は經濟上に於ては何等の價値をも有せざるものにして、彼の生産上に於ける自由は彼をして社會の要求を滿足する爲めにあらずして、實は自己一身の享樂の爲めに行動する無用の寄生蟲たらしむるのみであろう。實に吾人にして自給自足の原始野蠻の社會狀態に復歸せざる限り、他の何人かの慾求に聽くは一切の勞働者の免る可からざる運命である。然れば吾々は國家と勞働と相

互に協同す可しと云ふ此提案には初めよりして
軈て重大なる經濟上の能率低下となつて其實を
現ず可き不和軋轢の芽生しつゝあるを見るので
ある。詳言すれば生產者を代表する國家的組合（ナシヨナアルギルド）
と消費者を代表する國家とが完全なる調和を保
ちて行動するにあらざれば、現組織の下に於て
經濟的機關の大阻碍物たるの實ある同盟罷工等
の如き軋轢は、一層激烈なる衝突となるであろ
う、何となれば是等は政治的機關を通じて全社
會を其渦中に卷き込むであろうからである。

而して此問題に對しては、コオル氏は十分明
瞭に其思索を盡さなかつたやうに思はる。蓋し
氏は其「產業自治論」の八六頁に於て「幾多の
組合（ギルド）は相聯合して一個の中央組合會議を形つく
るであろう。此中央組合會議は最高なる產業團
體であつて、生產者としての人々に對し恰かも
議會が消費者としての人々に對して有すると同
じ關係を有つであろう。……議會も組合（ギルド）
合會議（コングレツス）も共に最高統治者たるを得ない。何となる
れば前者は最高なる地域的團體であり、後者は
最高なる職業的團體であるからである。前者は
主として消費に干與するが故に其支配は消費者
の掌裡に存す可く、後者は其主たる業務が生產
に關するが故に生產者に於て之を支配す可きも
のである」と說き、其八七頁に於ては再び「壹
個の組合（ギルド）が議會と相爭ふ場合には――自分は斯
の如き場合實に在り得可しと思惟す――其最終
審判は總ての組織的に團結せる消費者と一切の
組織的に團結せる生產者とを代表する一個の代
表團體に於て決定せられねばならぬ。產業團體
的事項に關する究極の支配權は當然議會と組合（ギルド）
會議とを平等に代表する或る共同團體に歸屬す
可きものゝ如く思はれる。蓋し然らざれば裁斷
は自ら或は消費者に有利に或は生產者に有利に
偏せんとする懼あるが故である。乍併斯の如き
問題に對して或は議會より或は組合會議（ギルドコングルツス）よりし
て兩者の何れよりも上に立つ代表團體に訴ふる
所ありとすれば、國家の至上權と謂ひ組合會議
の至上權と謂ふ說は明かに廢棄せられねばなら
ぬ、而して吾々は最終の允許を單に一切の私人
を代表するのみならず、其各種の社會的活動に
於ての一切の私人を代表する或る團體に求めね
ばならぬのである。機能に基く各種の結社は國
民的生活の必須的表顯として承認せられねばな
らぬ。而して國家は單に其一つ――長兄、白眉に
過ぎぬとして承認せられねばならぬ。至上權を
斯の如く異れる意義に解する新しき社會哲學は
未だ爲し遂げられぬが、併し若し組合社會主義
者にして絕ゑず自己の用語及び他人の用語に躓
くの煩より脫せんと欲するならば、ギルド思想
と相適ひ、自己の創造せんとする社會の結構と
相適ふ一個の理論を發見し且つ明瞭に之を形つ
くるの機を失してはならぬ」と言つて居るが、
其意は智者には明瞭であるかも知れぬが通常人
には甚だ不明であるからである。通常凡俗の讀
者は以上の言を讀んでコオル氏が組合が議會と
相爭ふことは甚だ有り得可きことであると考ふ
るものなるを見るのみである――而して氏の此
推察には吾々の心より推服する所である。更に
コオル氏は究極の是認は議會及組合（ギルド）會議の何れ
にも存せずして、却つて此兩者以上に立ちて而
かも一方に於て此兩者を代表すると共に他方に
於ては單に一切の人々を代表するのみならず、
實に又た一切の人々を其各種の社會的活動に於
て代表する或る代表團體に存せざる可からずと
論を結ぶのであるが、是も亦た普通人にとりて
は何の意味たるやを怪しまざるを得ざるものの
である。否更に一歩を進めて之を言へば、國家は

單に機能的結社に外ならぬと云ふ主張も亦た普通人にとりては當惑を覺ゆるものにして、彼はコオル氏が組合社會主義は須らく此問題に對して明瞭なる理論を作り、此不可思議なる治者團體の寄り集りが如何にして協調して活動し得るや、若くは如何にして實際の效果を擧げ得るやを吾々に告げざる可からずと言へるに對して此點より熱心に贊成せんと欲する者である。

閑話休題、若し消費者にして何が生産せらるべきやの問題に對し發言權を有するとせば、而して若し國家的組合制度の下に於ては國家は消費者を代表するものとせば、組合社會主義に依り勞働者に約束せらるゝ自由なるものは國家の統制に因りて極めて重大なる制限を蒙るであろう。コオル氏は一〇六頁に於て國家は「生産者の問題を決定し生産に對し直接の統制を施行す可き何等の要請をも有たぬ、何となれば國家の權利は其が消費者を代表し、消費者は國民的所産の分割、若くは社會に於ける所得の分割を制御す可きものなりと云ふ事實の上に立つからである」と說くが、若し消費者にして斯の如く社會の所得分割に關して決定する所ある可き者なりとすれば、生産の衝に當る組合員は消費者の希望に從ひ消費者に依りて支給せらるゝ報酬に對して勞働せねばならぬ者たるは明々白々である。而して然る時は組合員の自由は單に「其下に仕事の遂行せらるゝ條件」（一〇七頁）の支配に局限せらるゝであろうと思はる。コオル氏は一〇八頁に於て「勞働者は産業の正常なる指揮を統御す可きであるが、併し彼等は恣に商品の代價を左右し、何を消費す可きかを消費者に命令してはならぬ、他の語を以て之を要約すれば彼等は個々の「利潤漁り」が今日社會を掠奪しつゝある顰に倣ひて社會を掠奪してはならぬ」と言ふ。自由競爭の下に於ては所謂「利潤漁り」は社會の賺はんと欲する何物かを賣るに因りて「社會を掠奪」し得るに過ぎぬが、組合制度の下に於ては消費者は抑も如何にして其希望を表明し得るか明かでない。恐らくは多數の投票に因つて然るものであろう、而して其は衣服其他の裝ひが流行に添はんよりは寧ろ身體に快適ならんことを好み、他物に於ける嗜好は間々常規を逸せるが如き人々にとりては惟ふに喜ばしき光景であるであろう！

コオル氏の所論が最も興味深くして又た異彩を放てるは其賃銀制度論である。氏は一五四頁に於て「賃銀制度こそ資本主義の有するあらゆる壓制の根源である……賃銀制度には國家的組合員が其注意を向くるを常とする四つの際立てる表徵がある。以下之を最も平明なる言辭にて述べて見よう。（第一）、賃銀制度は勞働者より「勞働」を抽出するが故に、一は他を俟たずして之を賣買することを得、（第二）、從つて賃銀は其勞働を雇傭するとが資本家に有利なる場合にのみ賃銀勞働者に仕拂はる。（第三）、賃銀勞働者は其賃銀に代るて生産の組織如何に關する一切の管理權を交付す。（第四）、賃銀勞働者は其賃銀に代るて自己勞働の生産物に對する一切の要請を放棄す。」故に「若し賃銀制度にして廢止せらる可きものなりとすれば是等四個の劣等化せる地位の表徵は悉く除かれねばならぬ」と主張する。

乍併此所謂四個の劣等化せる地位の表徵とは果して何であるか？。人間の勞働が其勞働者の賣買なくして賣買せられ得と云ふ事實は、誠に組合社會主義者の承認するが如く、勞働者と其勞働とが家畜の如く合せて賣買せらるゝ彼等の（賃銀的奴隸と區別して）所謂動産的奴隸より數段の進歩を示すものである。人間が自己の勞

働を自己と引離して賣ると云ふ事實は、假りに其が劣等化せる地位の表徴なりとするも總ての頭腦勞働者及び自己の熟錬若くは其生産物を消費者に賣却する一切の專門職業者に依りて等しく營まるゝ所である。而して自分にとりては、自分が此書の一冊を一讀者に賣ると云ふ事實が、同時に自分自身を其讀者に賣ることゝならざるは、自他の爲めに寧ろ便益であると思はるゝのである。

乍併或る意味に於ては各人の仕事は各自の一部分である。各人は自己の仕事の中に自己の一部を注入するのであつて、勞働者が自己の一部を賣る制度、換言すれば自己の仕事の一部を他人の一部と交換し、斯くて互に生産者となり消費者となつて、總ての人が共同の幸福の爲めに協働し自己の一部分を之に寄與する大なる千手經濟體となる制度は、巨大なる利益を有するものと言ふ可きである。而して此制度は調和を保つて發達する幾多の可能性を持つて居るのであるが、近時思想界の流行は根本的に誤れる何物かゝ其裡に伏在すと斷じ去つたやうである。然れば例へばアァサァ・ヘンダアソン氏は最近或る席上に於て「勞働者は從來全く顧みられざりし根本原理の承認を基礎とせる新しき方法を要求する。其第一は人間の勞働は鐵、石炭、乃至は綿の場合に於けるが如く需要供給の法則に依つて左右せらるゝ商品ではなくして人格の加はり人格の表現せるものであると云ふことである」と公言して居る。が併し何人か能く聞く耳に如何にも麗しく響く此句の眞義を發明し得る者ぞ？。勿論吾々は總て他のことに於けると同樣吾々の仕事の中に自己の人格を表現するものであるが、此事實は何故に吾々が之を賣つて他人の仕事に換へてはならぬと云ふ理由になるのであるか？。然り吾々の仕事は何故に、恰かも吾々の他の行爲が他人の嘉納、不嘉納に依りて社會的價値を有するが如く、他人の好みに適ひ、慾求に添ふ其程度に準じて評價せられてはならぬのであるか？。

劣等化せる地位の第二の表徴は勞銀が其勞働を雇傭することが資本家にとりて有利なる時に限り勞働者に仕拂はると云ふ事實であるが、此劣等化は一切の他の勞働者に依つて擔はるゝものであつて、現在の生産の爲めに過去勞働の生産物を借り來る資本家の如きも亦た同じ運命を免れぬのである。患者、依賴者の爲めに直接勞働する醫師、辯護士の如きも、自己を雇傭する患者、依賴者を見出し得る時に於てのみ能く然かするを得るに止るのである。

次に第三の表徴は賃銀勞働者が生産の組織に對し何等の管理權をも有せぬと云ふ點に存するのである。換言すれば其は資本家が極めて困難にして又た微妙なる事業の危險と責任とを勞働者に代つて之を負擔するが故に勞働者自から之を分擔するの必要なきに至ると云ふ點に存するのである。而して同一事は賃銀勞働者が自己勞働の生産物に對する一切の請求權を引渡すと云ふ第四の表徴にも亦た適合するのである。蓋し勞働者の生産するものをして經濟上に於て價値あるものたらしめんが爲めには、何人かに相當の代價を以て賣却せねばならぬのであるが、此販賣の方面こそ實は甚だ多難なる方面にして企業家資本家の最も苦心を要する所であるからである。

併しコオル氏は是等の表徴は總て拭去せられねばならぬ、從つて國家的組合は少くとも次の事項を勞働者に保證せねばならぬと斷定した。

「（第一）、勞働者は有効需要を有する若干勞働力

の腐朽し易き容器たるに止まらずして、壹個の人間なりとして承認し且つ之に報酬すること。（第二）、從つて雇傭中は勿論非雇傭中にも之に酬ひ、疾病中も健康時と等しく之に報酬すること。（第三）、同僚と協力して生産組織の管理に當ること。（第四）、同じく同僚と協同して自己勞働の生産物に對する權利を確立すること。」

然れば國家的組合（ナショナルギルド）の目的とする所は各人の生存を理由として之に報酬し、各人が「有効需要を有する勞働力の腐朽し易き容器」たるを理由として之に報酬するを拒まんとするものであると解し得るのであつて、斯の如きは甚だ魅惑的ではあるが差當り何の利益もなき怠慢癖を有する人々にとりては、誠に歡迎に堪ゑたる綱領であろう。併し吾々は是に對して斯の如き企畫は各自の利益を追求する現在の制度の下に於て見るが如き仕事の能率を齎らす可きや否やと云ふ問題を提出せざるを得ないのである。單に生存せりと云ふ事實が十分なる報酬を齎らす場合に於ても猶ほ普通人は果して勤勉に其仕事に從事するであろうか？。幾多の人々が報酬の問題を離れて仕事の爲めに仕事するを樂しむであろうと云ふことは勿論あり得ることである。併し現在の人情を基として議論を立つれば若し仕事の量を各人の撰擇に任せ、一切の人々に働くと否とに拘らず共同の資源から十全なる報酬を與ふるとせば、其資源は忽ちの間に盡きて社會は軈て糧食にすら窮乏するであろうと論斷せざるを得ないのである。然れば國家的組合が人間の慾望を滿足するに十分有力なる一個の力たらんが爲めには吾々の内に新しき精神と仕事に對する新しき熱心との發生を見ねばならぬのである。

コオル氏は一〇五頁に於て「國家と勞働組合とは、若し其が價値ある社會の二大柱石たる可きものなりとすれば、根本的に變化せられ、新しき精神に因て貫かれねばならぬと云ふことは他の何事よりも確實である」と說いて此を承認して居る。而かもコオル氏は第九頁に於て「戰爭は或る意味に於て總ての階級の人々をして犧牲を提供せしめた。乍併其は斷じて人類同胞の觀念を基礎とせる社會をより近く齎らす可き人心の變化を有産階級の間に導きはしなかつた」と說いて居るから、コオル氏の見解に於ては有産階級は今猶ほ依然として昔ながらの心情を改めざるものである。

然らば他方勞働者階級の間には果して人類同胞の觀念を基礎とせる社會をより近く齎らす可き人心の變化を見たであろうか？。吾々は一つの勞働組合と他の勞働組合との間に、將た又た一種類の勞働者と他種類の勞働者との間に不和の存することを耳にせるが如く覺ゑて居る、而して斯の如きは戰爭の疾苦の下に於ては極めて自然にして避け難きことゝなすものではあるが、併し其は同時に働く者にも働かざる者にも一樣に人間たりと云ふを理由として給與するの制度が社會の經濟的能率に甚大なる試錬たらざるが如き時代に到達するの如何に前途遼遠たるかを吾々に語るものと謂ふ可きであろう。

而して更に轉じて、如何にして此大改革を實行せんとするかと云ふ方面より之を見るとして、コオル氏が一一七頁に於て「今日の勞働組合よりして更に大なる勞働組合生れ出でねばならぬ。此大勞働組合に於ては一職業を他職業より區別し甲なる産業を乙なる産業より區別することを最早爲さぬであろう。産業的勞働組合（インダストリアルユニオン）は自由の大道に隣接して居る、産業的勞働組合は「一産業毎に一勞働組合を爲し、一旗幟を有す」の意味たるに止まらずして一切の産業を連ねて

一大勞働軍を編成することを意味する。……産業が全社會の爲めに勞働者自身に依りて管理せられ組織せらるゝにあらざる限り勞働者は自由たることを得ぬ」と云ふは、氏が他の個所に於て說ける思想と稍相容れざるものであろう。何となれば前に揭げたる氏の言より見れば勞働者は産業を組織する丈けであつて、社會の利益てふことは一個の「機能的結社――其が如何なる意味なるにせよ――に過ぎぬと見做さるゝ國家に依つて擁護せらるゝものなるに、今や忽ちにして其勞働者は全社會の爲めに自ら團結す可きものであると告げらるゝを見るからである。乍併斯の如きは强ひて之を論ずるの必要なきが故に暫く之を措くとして、コオルが一六二頁に於て「賃銀制度は資本勞働の再結合、即ち此兩者が總ての人の掌裡に置かるゝと共に終熄せねばならぬ。此を齋らさんが爲めに、賃銀勞働者は資本の管理を握らねばならぬ」と言ふは果して如何なる意味であろうか？。コオル氏は此が果して賃銀勞働者の階級が資本の設定せる工場機械等を强奪することを意味するや否やを明示せぬ。而して又たコオル氏は「此管理は國家的組合の下に於ては國家を通じて集産的に施行せらる」と說くのであるが、國家が如何にして此管理を得るに至るやに就ては全く說明を加へずして闇黑中に吾々を放棄するのである。然れば此點に關しては吾々はコオル氏よりもホブソン氏の方一層の光明を吾々に與ふるものであると言はねばならぬのであるが、今は之を玆に試みないであろう。

（附記、ウイザアスの評論は次にホブソンに及びスタアリングに至つて居るが、其筆法は概ね同一にして特に勝れりとも思はれぬから、左まではとして玆に之を打切つて置く。）

シヨオを中心として觀たるフエビヤン社會主義運動（一）

町田義一郎

一

一八八三年三月十四日に Karl Marx が倫敦で死んでから半歲餘にして彼の社會思想とは直接關係のない純粹な英國流社會主義の一派が發生した。Fabian Society の成立がそれであつた。是が機會となつたのは Thomas Davidson（一八四〇――一八九〇）の渡英であつた。（註一）彼の倫敦の客寓には宗敎道德社會思想等に興味を有する靑年達が集つて來た。彼が倫敦を去つてから此集會は後に History of Fabian Society を著はした（Pease）の宅で隔週催される事になつた。第一回の一八八三年十月二十四日の會で豫て Davidson が彼等に說いて居た『新生』（Vita Nuova）といふ論文の朗讀とその中に示された崇高な生活を營む事の出來る樣な共産主義社會の建設は如何なる方法で可能になるかに就て討論を行つた。拾一月七日の第二回には討論の結果『最高道德の可能性に據つて社會の改造を行ふ事を終局目的とする聯盟を作る事』と云ふ決議を行ひ、次の廿三日には次の案が表面上滿場一致で可決された。『競爭制度は多數の者を犧牲にして小數の者に幸福と快樂を與へるものである事及び社會は一般の安寧及び幸福を確保する樣な方法に據つて改造されねばならぬと云ふ事を本會々員は主張す。』併し此決議は精神的な方面を欠いてゐると云ふ非難が會員中にあつたので更に十二月七日に左の如き案が提出された。